

地獄の図像における女性の形象

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2023-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 東芹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0002000045

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



地獄の図像における女性の形象

The Female Images in Eastern Asian Hell-Themed Paintings

Li DongQin 李 東芹

はじめに

地獄は仏教において、衆生がその生前の業の結果として輪廻転生する天道、阿修羅道、人道、畜生道、餓鬼道、地獄道の六道のうち最下層の世界である。因果応報の思想に組み込まれた死後の世界であり、現世で犯した悪行への報いを受ける苦しみの場であった。その思想はインドに誕生し、中国で受容される中で十王信仰が晩唐（9世紀後半）までには成立し、続く宋代（960～1127）には広く流布した。中国に留まらず、周辺地域にも影響を及ぼしており、朝鮮半島では甘露嶺（人間の苦を救い、極楽往生を主題とする施餓鬼法会図）の流行を見た。日本でも特に平安時代（8世紀末～12世紀末）には末法思想の広がりとともに地獄の信仰が高まり、鎌倉時代（12世紀末～14世紀初）以降、中国の図像も取り入れた十王地獄図が盛んに制作されるようになった。南北朝（14世紀半～同末）・室町時代（14世紀～16世紀）には天皇や貴族は前時代に作られた地獄絵を鑑賞する機会も多かった。南北朝の騒乱から応仁の乱そして戦国期へと至る時期、貴族の地位や生活が揺らいでいたが故に不安感が地獄絵への共感を生んだ。死後の救済のために、多種多様な絵画形式が描かれて、庶民階級へも地獄のイメージが浸透していった。江戸時代に熊野比丘尼によって熊野の勧進に用いられ流布した「熊野観心十界曼荼羅」は、地獄絵の展開の総括ともいえる“仏教宇宙図”である。

筆者はこれまで室町～桃山に描かれた「十王地獄図」作例の表現技法調査と復元制作を研究の中心としてきたが、その過程で地獄の描写にしばしば女性が登場することに気がついた。この点に注目すると、女性の形象は六道思想の中に不可欠な要素として組み込まれているとともに、地域や時代による変化も見受けられる。そこで、本稿では六道思想に関する仏教美術作例の中でも、中国の

男尊女卑の思想が色濃く表れた宋時代の大理石刻と日本近世の地獄絵を総括する作品「熊野観心十界曼荼羅」を中心とし、その他の事例も補足的に用いて、女性の形象のもつ意味や表現を考察する。

第1章 地獄思想の成立と展開

はじめに、インドにおける地獄思想の成立と、中国での展開、日本への伝播などを概観しておく。地獄は仏教特有の思想ではなく、インドに古くからあった死生観であり、古代インドのパラモン教の聖典『リグ・ベータ』に遡る。地獄の王と想定されるヤマ（Yama）は、死者の罪を審判する。地獄はヤマの天国に対立する世界で、女の悪魔や魔術師、人殺しなどの住む所とされ、光のない闇黒の最下底の世界である。初期仏教の経典である『阿含経』においては、八大地獄、八寒地獄、地獄の位置、地獄に墜ちる罪業などが説かれ今日にまで伝わる地獄の概念が成立したことが分かる。¹

『増一阿含経』第41巻「馬王品」では、女性について、「世尊、長老に告げて曰く、女人に九つの悪法あり。云う、何が九つと為すや。一に女人は臭穢にして不浄なり。二に女人は悪口す。三に女人は反復なし。四に女人は嫉妬す。五に女人は慳嫉なり。六に女人は多く遊行を喜ぶ。七に女人は瞋恚多し。八に女人は妄語多し。九に女人は言うところ軽挙なり」と記述される。²

女性と六道思想の関係では、『妙法蓮華経』に、「五障」つまり女性は、梵天、帝釈、魔王、転輪聖王、仏の五つのものにはなれないとの考え方が説かれる。さらに、女性は、どんなに仏道修行に努め励んでも、女身のままで仏となることは不可能で、成仏するには男の姿に転じなければならない（変成男子説）とされた。³このように、仏教思想は発生の初期から男尊女卑の父権的な面をもつ

ていた。

中国における地獄に関する信仰は、古代の殷（商ともいう。前17世紀頃～前11世紀半）から秦～前漢（紀元前3世紀末～後8年）は仏教伝来以前であるが、既に固有の冥界観念があったことは、王墓の副葬品などからも明らかである。続く後漢（25～220）～魏晉南北朝（220～589）にはインドから多くの仏教経典が請来・漢訳され、地獄観念が中国の冥界観及び儒教の孝道と融合し、勸善懲惡の意図がより明確となった。唐（618～907）・五代（907～960）の時期に入ると仏教の信仰の高まりと普及に伴い、六道輪廻と地獄観念は一般大衆の間にも広まった。敦煌では地獄の壁画が多く描かれた。敦煌から発見された『閻羅王授記（十王）経』などには、理論的な整理、簡略化の傾向が現れた。『十王経』（『預修十王生七経』や『地藏菩薩発心因縁十王経』など）では、死者はおよそ次のような経路を辿る。まず、人は死亡すると「中有」という期間に入り、その魂は「死出の山」を越え、「三途の川」を渡る。その後、「十王」の裁判が七日ごとに下されて、その結果次第で来世の行き先が決まるのである。宋時代に入ると冥界の観念はさらに普及し⁴、さらに明（1368～1644）清（1616～1912）時代には、様々な善書が流行し、地獄果報思想は一般大衆の公正を求める要望に応えるようになっていった。

日本においては、仏教が信仰され始めた奈良時代（8世紀初～8世紀末）に既に地獄の絵画化された例があるものの、その具体的なイメージはまだ曖昧であった。平安時代になると源信（942～1017）が『往生要集』を著し、「地獄草紙」（東京国立博物館、奈良国立博物館）が描かれるなどより具体的なイメージが形成されてきたことがわかる。鎌倉時代に入ると『往生要集』や中国から新たに伝来した十王図を参照し、十王地獄図や六道絵が盛んに描かれた。南北朝・室町時代になると神仏の利益と地獄めぐりが庶民信仰に組み入れられ、地獄のイメージはより普及する。さらに江戸時代（1603～1867）になると、地獄のイメージは益々人々の心に浸透し、男尊女卑の父権宗教の影響で女性専門の地獄も更に増加していった。⁵

第2章 大足石刻の女性形象

(1) 母親としての女性像——「父母恩重経変相」

大足石刻は中国の重慶市の西方、四川省の東南部160kmの所にある。仏像を中心とした一大石窟で、晩唐に造営が始まり、宋時代に全盛期を迎えた。現在、大足県内には四十数箇所もの石刻群があり、彫像は五万體を超える。北山と宝頂山が最も有名で、規模も最大である。宝頂山の石刻は南宋密宗六代祖師の趙智鳳（1159～1249）を中心に約70年をかけて建立された石窟群であり、中国

が世界に誇る仏教遺跡の一つである。仏像以外にも当時の生活、風習を表したものもある。また、これらには儒家の倫理思想も反映されている。⁶

大足石刻の女性造像は表現内容により神像と人間の像に大別できる。さらに人間像のうち女性像は女吏、女房、官吏の家族、村人などに分けることができ、少女、妻、母親などが含まれる。

大足石刻宝頂山の「父母恩重経変相」がその一例である。「父母恩重経変相」は『仏説父母恩重難報経』の内容に沿って、高さ約6m、長さ約13mの龕の上部に七仏半身像、下部には子を養育する父母の恩徳を表わす十組の群像がある（図1）。

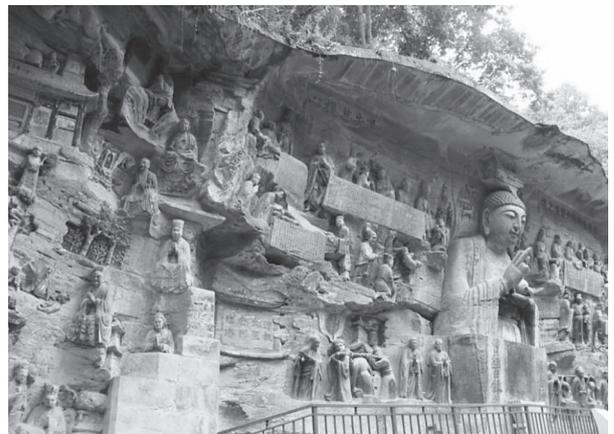


図1 大足石刻宝頂山 父母恩重経変相

第一「懐胎守護恩」は、母が懐妊し、ある女が碗をさし出して世話をする。第二「分挽受苦恩」は、分挽の際、一婦人が妊婦を後ろから支え、産婆が跪いて助産の支度をし、そばで夫が微笑みながら見ている（図2）。第三「生子忘憂恩」は、母親が子を抱き、父親があやしている。第四「嚙苦吐甘恩」は、赤ちゃんが母親の膝に坐って物を食べている。第五「推乾就湿恩」は、夜に寝小便して蒲団が濡れると、母親は乾いた所を子に譲り、自分は湿った所に寝る。第六「哺乳養育恩」は、大きくなった子が母親の懐に寄りかかり、片手で乳房をなでながら吸う。第七「洗濯不尽恩」は、母親は子のために洗濯する。第八「悪業所為恩」は、親はわが子の結婚の宴会のために豚や羊を殺し、甘んじて殺生罪をなす（図3）。第九「遠行憶念恩」は、両親は成長した子が遠くに旅するのを見送り、別れを惜しむ。第十「憐憫究竟恩」は、両親の前に子が跪く、親は老いてなお子のことを心配するものであるから、子は親孝行しなければならないという教訓である。⁷



図2 嚙苦吐甘恩



図3 推乾就湿恩

この絵物語式の彫像群は、宋代の家庭生活を反映しており、生活感に満ち、父母への称賛の図像である。父母が我々に無窮の愛を伝えることで、親孝行の大切さを強調している。しかし、その平和の生活の裏に隠された、母親が出産時の出血により地神と河川を穢した罪、豚や羊を殺し殺生罪を犯した父母の死後はどうなるのか、という恐怖をもまた喚起するのである。

(2) 世間の女性形象——「地獄变相龕」



図4 大足石刻 地獄变相龕

宝頂山第20号「地獄变相龕」は『大方広華嚴十悪品経』に基づいて作られている(図4)。本石刻は地獄の恐怖を伝えることで、仏教への帰依を促している。⁸全体は上下四段から構成され、最上段には十仏、二段目には十王及び二人の冥官が彫られ、上下二段の中心に地藏菩薩が彫られている。さらに下の二段は刀山地獄、鑊湯地獄、寒氷地獄、劍樹地獄、拔舌地獄、毒蛇地獄、鋸解地獄などの十八地獄が彫出される。

「養鶏女」はその中において特殊な像である(図5)。表されているのは、勤勉で美しい庶民の女性である。鶏を飼う女が身をかがめて籠を開け、雛が飛び出そうとし、二羽の鶏が籠の外で蚯蚓を奪い合っている。女は微笑みをたたえており、罪を犯しているとは思っていない。しかし、養鶏女の下に銘文石板には「大藏経言、仏告迦葉、一切衆生養鶏者入地獄…有罪若為利肉所口是、故主人入地獄」とある。石板の下には「刀船地獄」という四つの字が刻まれている(図6)。船の上では多くの鋭い刀が二人の受刑者を突いている。このことから、銘文が刻まれた四角い石板は、平和な養鶏女と獰猛な顔をしている受刑者を分断しており、上下の画面が人間界と地獄を隔てている。



図5 養鶏女



図6 刀船地獄

鶏は蚯蚓を食べ、人は鶏と卵を食べる。鶏を食べるのことは仏教的に「罪」であるが、因果関係からすれば養鶏自体がこの「罪」の原因であり、これも「罪」を犯していることになる。⁹

養鶏の女は一般的な民衆であるが、現世に犯した過ちのために死後に懲罰を受けなければならない立場にある。その要望は美しい女の形象として塑造されており、罪とのコントラストが本像を見る者の地獄への恐怖感をさらに強める。極悪な人だけでなく、一般の人々にも自分の日常生活を反省することが求められているのである。

第3章 地獄に墜ちた女性形象

(1) 「十王地獄図」——罪人としての母親とその子

中国浙江省の寧波は、古くから海外貿易の港町として栄え、日本との往来も盛んであった。宋代から元代(1271～1368)初めにかけて、この地方には道釈画を得意とする職業的な画家の集団があり、金大受、陸信忠、陸仲淵の款記をもつ地獄十王審判の主題の作品が多く請来されている。

奈良国立博物館蔵、陸信忠「十王図」の泰山王幅(図7)には、卷子を持った赤子が母親の背後を歩いているが、母親を慕っているのではない。この赤子は前世において母親の手で墮胎あるいは間引されたのである。巻物は、その事実を告発するための訴状であり、閻魔王庁を訪れて自分を殺した母と再会した訳である。

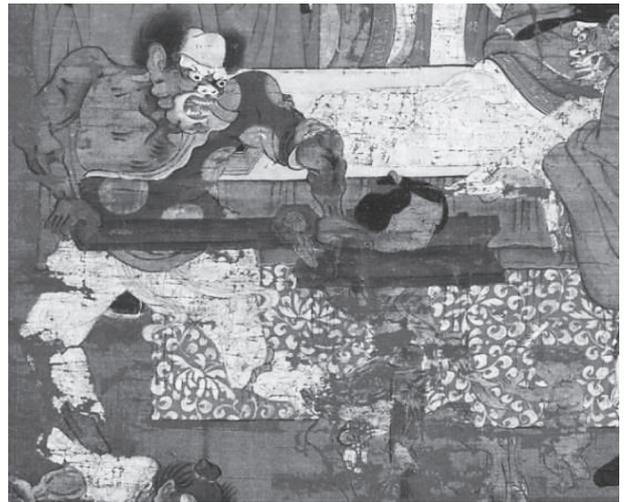


図7 「十王図」奈良国立博物館 卷子を持つ赤子

『預修十王経』や『地藏十王経』等にはこの図様の典拠となる言説は見えないが、南宋初期に成立したと推定される道教経典『太上感應篇』巻二十七に挙げられた種々の罪のうちの一つに「損子墮胎」があり、そこには「一王者ありて一特殿に座す。殿下に百の夫人列類し、おのおのに小児の抱捉し号呼索命せるものあり。孕むこと兩三月にして自らその胎を毒する者あり、(中略)争鬪によりて触れて損なう者あり、(中略)児の啼哭するを怒りて打擲することによりて死に至らしむる者あり、(中略)王者一一詰問し、程詰せざるなし」と記され、中国で子殺しが地獄へ墮ちる大罪と認められていたことが分かる。しかし、本図では罪の対象を母親に当て、墮胎の決定に関わる父親の存在が欠落している。¹⁰

鎌倉時代の聖衆来迎寺本「六道絵」は全十五幅のうち四幅に八大地獄のうち等活地獄、黒繩地獄、衆合地獄、阿鼻地獄が描かれる。地獄道四幅の図様は『往生要集』の言説との結びつきが強く、この四幅とは別に、閻魔王庁の様子を描いた一幅も含まれる。表現面では中国からの請来絵画の図様が多く参照されている。女性の亡者の背後には男性の亡者が描かれ、彼女の生前の夫である可能性が考えられる。その二人の間には裸の赤子が一人いる(図8)。赤子は右手で母親の裾をつかみながら、左手に卷子状の文書を持っている。



図8 「六道絵」聖衆来迎寺 罪人の親と子

次章で詳しく取り上げる「熊野観心十界曼荼羅」の画面右下にも首枷をつけられた女性の亡者が獄卒に連行され、赤色の衣を着ている童女が後を追っているのが描かれている（図9）。これも同様の図像である。



図9 「熊野観心十界曼荼羅」罪人の親と子

(2) 熊野観心十界曼荼羅——女性特有の地獄

室町末期以降には熊野比丘尼など天台系の遊行宗教者によって地獄の信仰が地方へも流布した。その絵解きに使用され17世紀初期から19世紀頃まで流行した「熊野観心十界曼荼羅」（図10）は、現在60点を超える作例が確認されている。半円形の「老いの坂」の上り下りにたとえられた人生の歩みを画面上方に描き、画面中央に「心」字が置かれ、その下方には阿弥陀聖衆来迎と六道世界の様々な様子が描かれる。これによって、生きることの重要性を説くとともに、現世と来世とが結びついた輪

廻転生の生死観を表現し、古代から中世までの地獄絵の歴史的展開を総括する造形ともなっている。¹¹

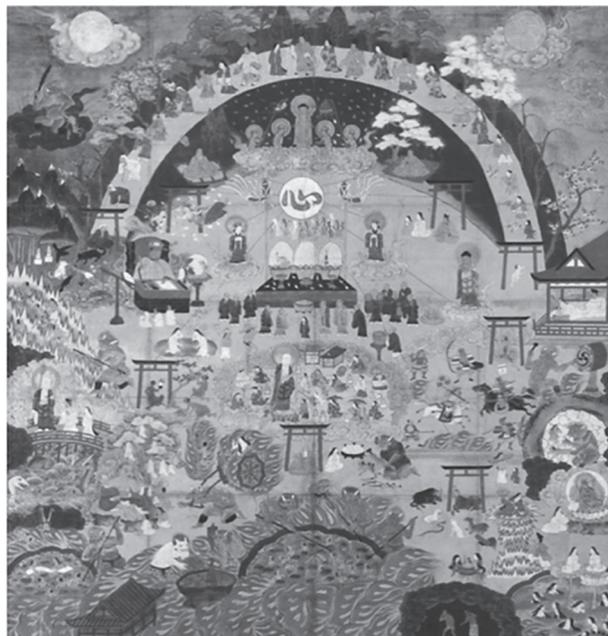


図10 「熊野観心十界曼荼羅」兵庫県立歴史博物館

「熊野観心十界曼荼羅」には、先述の母子の図像の他にも女性の地獄が描かれる。後に詳述するが室町時代以降に『血盆経』という中国伝来の偽経が広まり、出産や月経の血で大地を汚すという女性の不浄観を浸透させた。女性と穢れが結びつき、罪悪を強調する。聖域への立ち入りを制限する女人結界から、女性自体を規制する「女人禁制」という強い禁忌になっていく。

① 両婦地獄（ふためじごく）——愛憎の罪業



図11 「熊野観心十界曼荼羅」両婦地獄

「両婦地獄」は「二女狂」とも呼ばれている。画面右下に位置するこの地獄は、女性の嫉妬から生まれた地獄と

考えられているが、典拠ははっきりしない。『熊野観心十界図』では、1人の男性が蛇体となった2人の女性に巻き付かれる姿で描かれている(図11)。女性が蛇体となる説話はいくつか残されており、その中でも有名なのが「安珍・清姫伝説」である。和歌山県にある道成寺という天台宗寺院が舞台で、若い僧の安珍と清姫の悲恋の物語である。この中で、思いを寄せていた安珍に裏切られた清姫が激怒し、逃げる安珍を追いかける過程で蛇体に変化する。両婦地獄においても、蛇体の女性は嫉妬が罪で変化した姿として描かれている。しかし、見方を変えると、妻と愛人双方から蛇体で締め付けられ、火を噴かれており、男性が責め苦を受けているようにも見える。

②不産女地獄(うまずめじごく) 出産をめぐる罪業 その1

日本では古来、多くの山が信仰の対象で、俗人は遙拝するだけで、立ち入りが禁止される境界が設けられてきた。奈良時代には、仏教の戒律の「不邪淫戒」にのっとり、僧寺では女人禁制、尼寺では男子禁制だった。平安時代になると、「五障」思想の影響で、女性は一度、男性になってからでないと成仏できないという変成男子思想や、女性は梵天・帝釈天などになれないなど、女性差別的な教えが広がっていった。



図12 「熊野観心十界曼荼羅」不産女地獄

画面中央付近に位置する「不産女地獄」(図12)は、生前子どもを産むことができなかった女性、また産まなかった女性が墜ちる地獄といわれている。ここでは、細くて柔らかい灯心で堅い竹の根(男根の象徴)を掘り続けるという、生産性もなく終わりの見えない責め苦を受けて苦しむ女性の姿が描かれている。これは、子どもを産むことが女性の重要事項とされた「家」制度を反映したものといえる。¹²

③血の池地獄—出産をめぐる罪業 その2

「血の池地獄」、またの名を「血盆池」といい、女性が出産時の出血により地神を穢し、また血で汚れた衣を河川で濯いで水を穢し、人が誤ってその水を汲んで茶を煎じ、仏神に供養して不浄を及ぼしてしまったゆえに墜ちる地獄であると『血盆経』に説かれる。これも、女性のみを対象とする地獄である。『血盆経』は、十世紀以降、中国で作られた「偽経」である。室町時代には日本へも伝来し、大日本統藏経に『仏説大藏正経血盆経』と題して収められている全420余字からなる小経で、血の穢れゆえに地獄へ墜ちた女人を救済せんがための經典である。仏教本来の思想にはないが、長い年月を経て日本に仏教が浸透してくると、男性に比べて女性の方が罪深く穢れた存在であるとの考えが流布するようになった。¹³



図13 「熊野観心十界曼荼羅」血の池地獄

画面右下に描かれる血の池地獄(図13)では、池の血を飲まされるという責め苦を受ける女性たちの他に、2人の女性が蓮の葉に乗って救済される姿が描かれている。その上部には救済者である如意輪観音の姿があり、膝を

つく女性に一枚の紙の血盆経を渡している。女性であることが罪とされる世の中で、この絵のように救済を受けたいと『血盆経』を求める女性は多かった。

第4章 救われる女性——目連救母

日本では中国と同様、儒教道徳の影響を受け、「親孝行」は無条件に「善」であるとされることが多いが、仏教には元来そのような思想はない。日本の夏に、先祖が帰ってくるとして「お盆」の風習がある。「お盆」は、中国で作られた偽経『仏説盂蘭盆経』に基づいて行なわれるようになった行事「盂蘭盆会」である。現在の父母、七世の父母、六種の親族も三途（地獄・餓鬼・畜生）の苦しみを解脱し、衣食が足りようになる。まだ、父母が生きている者であれば、百年の福楽となる、というように『仏説盂蘭盆経』には儒教の親孝行の思想が盛り込まれ、東アジアの仏教行事の中の重要な一部になっていった。

『仏説盂蘭盆経』には、釈迦の高弟の一人である目連尊者が、餓鬼道に墜ちた母親を救うため、釈迦から盂蘭盆を教わり、無事に母を救済する話が記されている。「熊野観心曼荼羅」の中央部分にも目連救母が描かれている(図14)。地獄に墜ちて釜ゆでにされていた母親を釜から助け、涙をぬぐう目連が描かれている。また、釈迦に教えを請う場面(図15)や、盂蘭盆会の場面もあり、六道からの救済が大きな主題となっている。「目連救母」の説話は、儒家の孝の精神と結びつき、東アジアの信仰に深い影響を与えた。



図14 「熊野観心十界曼荼羅」目連救母



図15 「熊野観心十界曼荼羅」目連救母

第5章 刑罰を与える側の女性形象

(1) 奪衣婆(だつえば)——老女

中国の經典を基に日本で12世紀末に成立した偽経『地藏菩薩發心因縁十王経』に、老婆は人が死んだ後に最初に出会う冥界の官吏とされ、「奪衣婆」という名が使われた。奪衣婆は亡者の衣服を剥ぎ取って、川の畔に立つ衣領樹という大樹に掛ける。衣領樹に掛けた亡者の衣の重さにはその者の生前の業の軽重が表れ、その枝のしなりぐあいでは罪の重さがはかられ死後の処遇を決めるとされる。

奪衣婆の存在は、室町時代頃から民間に広まったとされている。この時、奪衣婆が脱がせた衣を木に懸ける役割の懸衣翁と一緒に登場している。懸衣翁とは、奪衣婆の隣にいるといわれる老人の妖怪である。『地藏十王経』は中国で晩唐に書かれたとされる『預修十王生七経(閻羅王授記四衆逆修生七往生浄土経)』をもとにしているが、こちらには奪衣婆等の記述がなくから、奪衣婆、懸衣翁は日本で創作されたと考えられている。

室町時代の地獄絵や六道絵は京都の上流階級のみならず、日本各地の庶民階級の人々によっても発願制作されるようになった。多種多様な作品が描かれて、地獄のイメージが浸透拡大していったことを示す。16世紀制作の奈良長岳寺の「大地獄絵」は、その典型的な作例である。ここでは、大樹の下に奪衣婆、懸衣翁が二鬼の姿で描かれている(図16)。



図16 長岳寺蔵「大地獄図」奪衣婆と懸衣翁

筆者の研究の主対象である千本引接寺（めんま堂）蔵「十王地獄図」は、狩野元信筆と伝えられ、室町後期から桃山時代頃に描かれた内陣2面、外陣4面からなる大規模な板絵である。外陣板絵の寸法は約縦209cm×横210cm、内陣板絵の寸法約縦209cm×横153.5cmであり、現存する地獄板絵としては日本最大といわれる。研究では当初の図様を復元したが¹⁴、本図の右下部にも奪衣婆が描かれていたことが赤外線写真から明らかとなった(図17)。体が大きな老婆が上半身裸で体を川へと向かって座り、その後ろの樹に衣服をかけている様子が描かれている。

「熊野観心十界曼荼羅」の左下部(図18)にもこれに類する図像が表されている。



図17 めんま堂 奪衣婆 赤外線写真と彩色復元図



図18 「熊野観心十界曼荼羅」奪衣婆

(2) 刀葉樹(とうようじゅ)——色欲の対象

「刀葉樹」は第三の地獄の衆合地獄にある別処である。『往生要集』には「またふたび獄卒、地獄の人を取って刀葉の林に置く。かの樹の頭を見れば、好き端正嚴飾の婦女あり。かくの如く見已って、即ちかの樹に上るに、樹の葉、刀の如くその身の肉を割き、次いでその筋を割く。かくの如く一切の処を劈き割いて、已に樹に上ることを得已って、かの婦女を見れば、また地にあり。(中略)罪人見已りて、欲心熾盛にして、次第にまた下るに、刀葉上に向きて利きこと剃刀の如し。前の如く遍く一切の身分を割く。既に地に到り已るに、かの婦女はまた樹の頭にあり。罪人見已りて、また樹に上る。かくの如く無量百千億歳、自心に誑かされて、かの地獄の中に、かくの如く転り行き、かくの如く焼かるること、邪欲を因となす」¹⁵とある。

つまり「邪淫邪欲」の罪を犯した者が墮ちることになっている。地獄の中に突如として美女が現れることは、亡者の邪心が生み出す幻影であり、見る者によってその姿は千差万別である。この女を求めて樹を上る男の身体は、剃刀状の葉によって切り刻まれ、血が流れる。しかし、男が樹上にいる場合は女を下から登らせ、女が樹上に到達すると今度は男を下から登らせる。男は女の幻影を追って永遠に樹を上り下りするのである。

『往生要集』によれば、刀葉林を上り下りする罪人を呵責して獄卒は「異人の作れる悪もて、異人、苦の報を受くるにあらず、自業自得の果なり、衆生皆かくの如し」と

傷を説いたという。また『正法念処經』卷五には「衆生の心は調順すべからずして、地獄中に在るも猶故是の如し。まさに知るべし心は信ずべからざるなり」とも云う。

聖衆来迎寺「六道絵」の刀葉樹の場面では、この場面では一人の美女を上下二段に描いて異時同図法で表現している。つまり異なる時間を一つの構図の中に描き込んでいる（図19）。



図19 「六道絵」刀葉樹 聖衆来迎寺

惑って、樹を登っている男性の身体のうち手の一部が残っていることが判明した。（図20）。

「熊野観心十界曼荼羅」においては、本地獄も画中右下の女性の地獄が集められた箇所描かれている（図21）。多くは、血の池地獄、両婦地獄の場面などに隣接して描かれている。男性の姿は多くの場合、裸ではなく貴族の狩衣のような姿で描かれている。一般に地獄図では亡者は通常は裸、あるいは禪姿で描かれるが、ここでは美女に魅かれる男性の姿という点が重視されたためかと思われる。その一方で、男性を色香で惑わす女性のイメージが反映している面も見逃せない。



図21 「熊野観心十界曼荼羅」刀葉樹



図20 ゑんま堂 刀葉樹 赤外線写真と彩色復元図

ゑんま堂の「十王地獄図」の左下に描かれた当該場面は、赤外線写真を通じて、樹の上方に十二単を着た端正な顔立ちの美女が正座していること、また女性の色香に

まとめ

伝統的な絵画における女性形象は、それぞれの時期の芸術的特色とともに社会的特色も映し出している。地獄図に表された女性像もまた、各時期の歴史、文化、信仰の表れである。

宋時代以降、男尊女卑思想が一般大衆の中にまで広がるにつれ、社会における女性の地位はますます低下した。大足石刻にみた顔だちが「高唐神女」のように美しく、自分自身を家庭に捧げる、優婉な女性像は、家父長制において期待される女性像の表れである¹⁶。一方で地獄に墜とされた女性は、このような伝統社会における理想的な女性とは逆の姿である。嫉妬心と独占欲を持つ女性、子供が生まれなかった女性、経血による穢れた女性、家庭に奉仕しない女性等が、「罪」を犯したとして地獄に描か

れた。女性の善悪は絵画作品を通じて視覚化され、それによって道徳的な教化が行われた。それは当時の社会の安定につながる一方で、背徳への恐怖心を植え付け、女性を圧迫した。

現代では地獄の信仰は昔に比べ随分と薄らいできていくことは否めないであろうが、一方で地獄絵に造形化されてきた女性のありかたや、様々な苦しみは、実は現代社会においても無くなってはいないのではなかろうかというのが、本稿をまとめてみての実感である。とは言え、芸術を取り巻く環境が大きく変化しているのも事実である。本稿が歴史における女性のイメージとその造形への理解の一助となり、現代の多様な女性像をめぐる造形の創出につながることを期待したい。

注

- 1 インドにおける地獄については、主に以下を参照。石田瑞磨『地獄』（法蔵館、2020年）。野口圭也「インド仏教における中宥・追善・死者儀礼」（『十三仏の世界』ノンブル社、2015年）。
- 2 『増一阿含経』卷四十一「馬王品」（大正蔵二、〇七六九c）。
- 3 『妙法蓮華経』卷四（大正蔵九、〇〇三五c）。
- 4 唐から宋にかけての地獄信仰については、銭光勝「敦煌文学与唐五代敦煌之地獄観念」（西北師範大学、2007年）、銭光勝『唐五代宋初冥界観念及其信仰研究』（蘭州大学、2013年）、孫昌武「佛教地獄念的文学呈現」（『中国文化』、第36期）を参照した。
- 5 日本の地獄信仰については、加須屋誠「東アジア・日本の仏教世界における地獄観 美術史研究の見地から」（『地獄への招待』、臨川書店、2018年）、西山克「六道の辻から東アジアを見る－熊野観心十界図をめぐる」（『地獄への招待』、臨川書店、2018年）を参照した。
- 6 2021年5月から9月にかけて、筆者は山西省などに現存する地獄・十王信仰関係の石窟、彫刻や絵画作品などを調査した。その概要は、拙稿「極楽と地獄への紀行－山西省隰県小西天と蒲県東岳廟を訪ねて－」（『美』第216号、2022年）に報告した。
- 7 大足石刻については、『空谷流響一大足石刻の発見と伝承一』（文物出版社、2021年）を参照。
- 8 『大方広華嚴十悪品経』（大正蔵八十五、一三五九b）。
- 9 王官乙「石刻のふるさと一宝頂山一」（『大足石刻芸術』、中国外文出版社、1981年）を参照。
- 10 加須屋誠『国宝 六道絵』（中央公論美術出版、2007年）。
- 11 西山克「六道の辻から東アジアを見る－熊野観心十界図をめぐる」（『地獄への招待』、臨川書店、2018年）。加須屋誠『仏教説話画論集』（松岳社、2019年）。
- 12 熊野観心十界曼荼羅については、西山克「六道の辻から東アジアを見る－熊野観心十界図をめぐる」（『地獄への招待』、臨川書店、2018年）、小栗栖健治『熊野観心十界曼荼羅』（岩田書院、2011年）を参照した。
- 13 加須屋誠『なぜ、われわれは地獄絵を観るのか？その成立から世俗化まで』（平凡社、2013年）。前掲、加須屋誠「東アジア・日本の仏教世界における地獄観 美術史研究の見地から」
- 14 「東アジアの十王信仰及び六道思想に関する図像研究－千本引接寺（みんま堂）蔵「十王地獄図」の復元を中心に－」（筆者の博論、2022年）
- 15 源信『往生要集』（『国宝 六道絵』中央公論美術出版、2007年）、花山勝友『傍訳 浄土思想系譜全書〔六〕往生要集 一』（四季社 2003年）を参照。
源信が参照・引用した『正法念処経』では、更に詳細な描写が続く「彼の樹頭有好き端正に嚴飾れる婦女有るを見、是の如くに見已りて極めて愛染を生ず。是の如き婦女は妙なる鬘にて莊嚴り、末香を身に塗き、塗香を身に塗り、是の如く身形は第一に嚴飾られ、身極めて柔軟にして、指の爪は纖く長く、熙怡として笑を含み、種種の寶を以て其の身を莊嚴り、種種に媚びんと欲し、一切愚痴の凡夫は見れば則ち心牽かる。彼の地獄人（中略）罪人は見已り、欲心熾盛にして、刀葉の樹頭より次第に復下る。彼の人既に下るに刀の葉は上を向き、炎火熾然り、利きこと剃刀の如く、是の如き利き刀は先づ其の肉を割き、次いで其の筋を断ち、次いで其の骨を割き、次いで其の脉を割き、次いで其の髓を割き、遍く体に瘡を作す。（中略）彼の婦女は復樹頭に在り、彼の人見已りて復樹に上ること」と述べている。
- 16 寧波仏画の十王図のうち五道転輪王幅には、「掌悪簿」を持った侍女が描かれる場合がある。また十王図とセットで制作された地藏菩薩像にも類似の侍女が左右二体描かれる。救済にかかわる侍者の可能性があるが、この点に関しては今後の課題としたい。また、五道転輪王幅に描かれる士大夫形とその夫人については、土地神の張大帝夫妻であるとの考証が近年発表されている。（沈宏琳「陸信忠系十王図における士大夫形象－土地神としての張大帝一」『美術史』191号、2021年）

図版出典一覧

- 図1 筆者撮影。
- 図2 『空谷流響一大足石刻の発見と伝承一』（文物出版社、2021年）、91頁。
- 図3 同上、93頁。
- 図4 筆者撮影。
- 図5 「石刻のふるさと一宝頂山一」（中国外文出版社、1981年）、図版84。
- 図6 筆者撮影。
- 図7 『HELL 地獄』（広済堂、2017年）、320頁
- 図8 『国宝 六道絵』（中央公論美術出版、2007年）、148-149頁。
- 図9 『富山県 立山博物館 開館10周年記念資料集 地獄遊覧－地獄草紙から立山曼荼羅まで一』（大東印刷、2001年）、64頁。
- 図10 同上、64頁。
- 図11 同上、64頁。
- 図12 同上、64頁。
- 図13 同上、64頁。
- 図14 前掲『富山県 [立山博物館] 開館10周年記念資料集 地獄遊覧－地獄草紙から立山曼荼羅まで一』、64頁。
- 図15 同上、64頁。
- 図16 奈良地域関連資料画像データベース 長岳寺蔵「大地獄図」第2幅
- 図17 筆者撮影と復元制作
- 図18 前掲『富山県 [立山博物館] 開館10周年記念資料集 地獄遊覧－地獄草紙から立山曼荼羅まで一』、64頁。
- 図19 前掲『国宝 六道絵』、24頁。
- 図20 筆者撮影と復元制作
- 図21 前掲『富山県 [立山博物館] 開館10周年記念資料集 地獄遊覧－地獄草紙から立山曼荼羅まで一』、64頁。